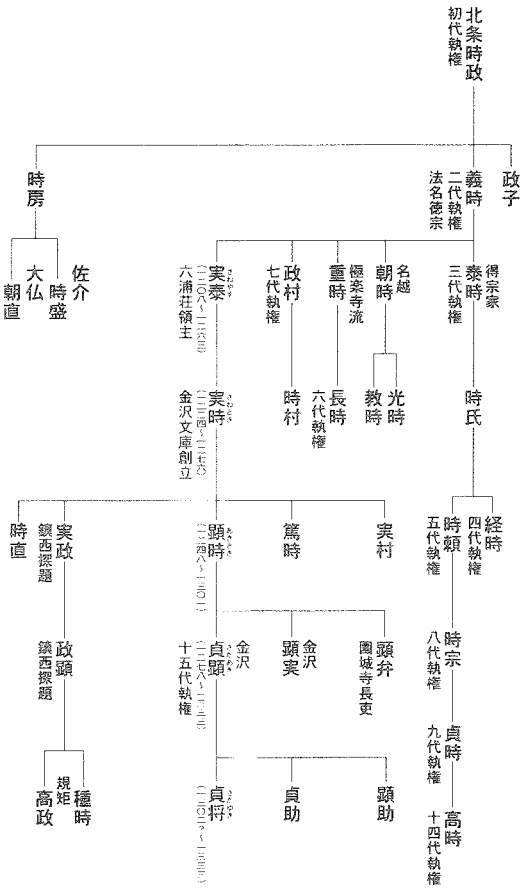
「金沢文庫と称名寺」探訪記

井　尾　義　徳

金沢北条氏の菩提寺「称名寺」

昨年の春、国立国会図書館所蔵の資料収集を目的に上京した。羽田に降り立ったその足で京急にとび乗り、蒲田で乗り換えて横浜方向に向かった。電車はいつものモノレールとは逆方向に疾走する。実は、その日の目的地は、横浜よりもっと先の京急「金沢文庫」駅であった。街の家並みも街路樹も、近くの丘陵を覆う樹々の緑も、すべてがおだやかな春の陽ざしに包まれて、まばゆいばかりの明るいたたずまいを見せていた。三浦半島の付け根に近いこの界隈は、鎌倉や横須賀が目と鼻の先という古来の要衝であり、後世「金沢八景」として広く名を馳せた風光の地でもあった。その名もゆかしい「金沢文庫」駅から、国道を横切り金沢区金沢町の住宅街を東に15分ほど歩くと、左手に称名寺の朱塗りの惣門が見えてくる。明和８（1771）年再建という赤い門をくぐると、北にまっすぐ伸びる参道の桜並木は五，六分咲き、その先に仁王門と呼ばれる大きな楼門がそびえて見える。これはまた惣門とは異なり、全く色彩を寄せつけない古木のにび色である。この仁王門をくぐりながら目にした景観には、思わず息をのんだ。ここでは、水をたたえた池にあざやかな朱塗りの反橋（そり）と平橋が中島を中継に架かり、池を東西に二分して金堂に至るように配置されている。これは、平安時代中期以降盛んになった、いわゆる浄土式庭園の系列にあり、その形式としては時代的に最後の遺例となることからも、庭園史上貴重なものといわれる。平泉の毛越寺庭園を彷彿させるような、浄土曼陀羅をイメージした見事な庭園である。そして各堂塔には、重文指定の仏像などが厳かに鎮座している。

称名寺は、真言律宗別格本山で、正式には金沢山称名寺。金沢北条氏一門の菩提寺である。創建の時期は明らかでないが、二代執権義時の孫に当たる実時（1224



北条氏略系図

北条実時の肖像（国宝）
－県立金沢文庫蔵－

～1276－金沢北条氏の祖）が、六浦荘金沢の居館で営んだ持仏堂（阿弥陀堂）がその基と推定されている。正嘉２（1258）年４月には、その持仏堂で「伝法灌頂」の仏法儀式が営まれた記録があるところから推定されたものであろう。そして、壮大華麗な七堂伽藍が完成したのは、実時没後約50年の三代貞顕の時代であり、元亨３（1323）年２月のことであった。この時描かれたのが、「称名寺絵図並結界記」（重文）である。淡彩を施したこの絵図は、縦95センチ、横91センチのほぼ正方形に近く、複製写真で見るとその広大にして豪華な様をうかがい知ることができる。この絵図はもちろん現在の県立金沢文庫に収蔵されている。

「称名寺惣門（赤門）」－明和８（1771）年再建－
（創建当初は茅葺）

「仁王門」この向こうが称名寺庭園
－文政元（1818）年再建－
（今は銅板葺、創建当初は茅葺）

「称名寺浄土庭園」朱塗りの反橋、平橋の向こうの建物が金堂
－金堂は元和元（1681）年再建（当初は茅葺）
橋は昭和62年復元－

現存する最古の武家文庫

－小さいトンネルを抜けると金沢文庫であった－

称名寺庭園の池の西側には、かつては赤い鳥居を備えた新宮（鎮守の八幡宮）や三重塔など華やかな伽藍の配置された様が、上記「称名寺絵図」によって分かる。池辺を歩いていると、左手の低く連なる山すそに二つのトンネルがある。左側の新しい方は近年のもので、照明もあり何の変哲もないが、これをぬけた所が県立金沢文庫の正面玄関になっている。興味を引いたのは、右側の素堀りのトンネルで、両口には鉄柵があって通れないが、よく見ると往年の柱穴跡も確認できる。このトンネルは、実は「称名寺絵図」にも記されており、それには入口の中央に縦線があり、両開きの扉のようなものがあったと推定される。つまりこのトンネルは中世鎌倉時代のものであり、称名寺庭園と実時居館の金沢文庫とを結ぶ通路の役割を果たしていたことになる。また幕末の寛政２（1790）年に公文書として正確に描かれたという「称名寺境内絵図」には、半円の下にはっきりと「切通」という文字を読むことができる。この中世の切通しを抜けたところが、新トンネルと同様に現金沢文庫の正面入口になる。川端康成の『雪国』にあやかれば、「トンネルを抜けると金沢文庫であった」ということになろうか。

「金沢文庫」の「金沢」は、本来「かねさわ」が正しい

そもそも「金沢文庫」は、地名にちなんで名付けられたものである。すなわち、「武蔵国久良岐郡

六浦荘金沢（むつらかねさわ）」は現在の「横浜市金沢区金沢町」に当たる。同じ「金沢」でも旧地名は「かねさわ」であり、現地名は「かなざわ」である。したがって、今の「神奈川県立金沢文庫」のパンフレットの表紙には、「Kanazawa Bunko Muscum」と添え書きされている。もちろん、金沢北条氏も「かねさわ」であり、その金沢を姓として名乗ったのは、第三代貞顕（1278－1333、15代執権となるも一月足らずで辞して出家）であり、世に北条氏金沢流と呼ばれる所以である。その「かねさわ」が「かなざわ」と読み変えられたのは、いつごろ以降でどのような事情によるのかについて、学芸員に尋ねると、江戸初期のころまでは「かねさわ」と呼ばれていた。が、しだいに称名寺が観光名所として知られるようになって、「江戸名所図会」などの名所案内や、安藤広重ら浮世絵師の描く金沢八景の絵図、地方文書に残された鎌倉・金沢八景を巡る道中記など、その繁盛ぶりは相当なものであったらしい。かくして、各地方から観光客が増加するにつれて、加賀藩の金沢（かなざわ）に引かれるように「かなざわ」とよむ人が増えていったのだという。今は金堂の前にある鐘楼は、称名寺絵図によれば苑池の対岸、仁王門の北側にあったことがわかる。この称名寺の鐘楼は、金沢八景の一つとして、旅人らの人気を呼んだという。ちなみに、「金沢八景」とは、「州崎の晴嵐、瀬戸の秋月、小泉の野雨、乙艫（おとも）の帰帆、称名寺の晩鐘、平潟の落雁、野島の夕照、内川の暮雪」の八景をさす。水戸光圀に招かれた明の心越禅師（1639－1695）の作「武州金沢能見堂八景詩」に由来する命名と伝えられる。

称名寺境内と金沢文庫を結ぶ中世の切通し。トンネルの向こうは現在の県立金沢文庫の正面入口。（新トンネルは左手20メートルにある）

平成２年竣工神奈川県立金沢文庫正面玄関を新トンネル内より見る。右手後方に中世切通しがある。

神奈川県立金沢文庫２Ｆ展示室

「金沢文庫」を創った北条実時

――ＮＨＫ大河ドラマ「北条時宗」にも登場――

金沢文庫成立の事情を詳しく伝える資料は、今のところほとんどないという。しかし、初代文庫長関靖氏が『金沢文庫の研究』（昭和26年、芸林社）で述べた実時創建説は、もはや定説となって各方面でむしろ断定的に扱われている。また、文庫創設の場所は、前述のように称名寺境内の一角、池を囲む庭園の西側にある小丘陵と「切通」（トンネル）を隔てた隣接の地、つまり今の県立金沢文庫新築の位置であると、結論づけられている。それは、以下

のような興味深い傍証の数々によって強く支えられている。すなわち、現金沢文庫新築前の大規模な発掘調査で、鎌倉中期の北条氏家紋である三つ鱗紋古瓦が出土したこと、実時の居館と見られる施設の地行面とともに、北条実時と目される金沢北条氏の居館と称名寺庭園を結ぶ道の遺構が確認されたこと、「文庫」の小字名が同地に残っていること、江戸時代以前にこの辺りの谷の地形を「文庫ヶ谷」と呼んでいたことが明らかになったこと、そして江戸時代の称名寺検地帳に「文庫・文庫入」等の地名があること、などである。

では、文庫創設の時期はどうか。それは、実時が病を得て鎌倉から金沢の居館にひきこもった建治元（1275）年ころ、つまり鎌倉中期と考えられている。ただし、実時は翌建治２年には病没することになるのだが。

実時の人となりについては、幕府の要職を歴任しながらも学問に関心が深く、和漢の書を読破し、稀覯書の校合にも力を入れた学者武将の代表格として知られている。時頼の参謀であり、時宗の訓育・指南役として知略に長けた北条氏の重鎮であったと伝えられる。本年のＮＨＫ大河ドラマ「北条時宗」１月の第４回であったか、疫病に感染して苦しむ時頼が、見舞いに来た嫡男正寿丸（後の時宗）に、自分の死後頼るべき人物について諭す場面があった。政治に関しては重時を、一門のもめごとには政村を、戦については戦上手の安達泰盛を、そして、人の心に迷うことあらば北条一冷静な実時を頼るべしと、苦しい息のもとで述べている。ドラマの中とはいえ、実時の人物像が浮き彫りになっているといえよう。この北条氏の知恵袋実時を好演しているのは、あのピーターこと池畑慎之介である。

「金沢文庫」を訪れた有名人 ── 吉田兼好は二度の東下りで ──

金沢文庫は、実時没後も金沢北条氏によって受け継がれ、金沢流第２代の顕時を経て、第３代貞顕のころが最も充実していたとされ、蔵書も優に４万巻を超えていたという。また、称名寺に数々の金沢北条氏の遺産が伝えられたことも、金沢文庫の蔵書とあわせて中世から有名であった。したがって、鎌倉、室町、江戸と各時代に有名無名さまざまな文人墨客、考古家が、金沢文庫や称名寺を訪れている。しかし江戸時代には、いわゆる権力者によって蔵書類が持ち出され、ご多分にもれず散逸した。特に徳川家康や前田綱紀らが「力」で持ち出した書類は膨大な数にのぼるといわれる。もっとも、これらの旧金沢文庫本は、現在は宮内庁書陵部や内閣文庫（現国立公文書館内）、尊経閣文庫（加賀前田家の文庫）などに所蔵されている。このことを見聞すると、創設は五百年を隔ててはいるが、わが佐伯文庫のたどった運命と酷似していることを思わずにはいられない。

さて、金沢文庫や称名寺を訪れた文人の中で、特筆すべきは吉田兼好であろう。京に住む兼好が、「徒然草」執筆以前に二度も関東に下向していることはまちがいないことで、しかもその都度北条氏や称名寺に身を寄せている。また、家康、光圀らの金沢来訪も興味深い。紙幅に限りがあるので、所蔵文化財の概要などと合わせて、稿を改めたいと考えている。ともあれ、昨年、一昨年と二度の金沢文庫・称名寺探訪が、一段と興味をつのらせる旅となったことを楽しく思い出している。

（いお・よしのり　短期大学生活文化科教授）